リーフリボン物語

愛宕中から誕生したリーフリボン。それはいじめをなくそうという生徒の強い思いから誕生した・・・。愛宕中の伝統として受け継がれてきたリーフリボン誕生の物語を、生徒の文章と挿絵で語ります。　　文―３年　青木真子　　絵―３年　水間　琴音

情報提供―櫻井優衣さん、松本淳史先生、佐藤彩子先生

私に何かできないか・・・

平成２０年、当時生徒会長を務めていたゆういさんは、ニュースをきっかけにあることに頭を悩ませていた。それは、近年全国的にいじめや自殺者が増えてきたことだ。最初こそ東京などの遠いことだと思っていたが、千葉、茨城と自分たちのすぐ近くまできていて、他人事ではないと思った。

ゆういさんはそのニュースを見て、いじめについて改めて考えた。そして「「いじめや嫌がらせなどは、自分は軽い冗談で、いじめのつもりではなくても、相手もそう思っているとは限らない」ということに気づいた。「いじめや嫌がらせのせいで、同世代で苦しんでいる人がいる」ことに、本当にかわいそう・・・と当時は単純にそう思った。

それならば、そのように辛い思いをしている人を少しでも減らすために、自分には何ができるのか・・・。そこでゆういさんは、「相手の立場」になって考えることにした。自分がもし、いじめに苦しんでいたらどうするのか・・・。自分がもし、一人で解決できない悩みを抱えていたらどうするのか・・・。そう考えた結果、「この人ならいつでも相談していいんだよ」という人を作ればよいのでは、という考えに至った。これならいじめに苦しんでいる人に、「自分の悩みを聞いてくれる仲間がこんなに周りにいる」と力強く感じると思ったからだ。また、いじめをなくす立場から見ても、「悩んでいるのは誰なのか」と探し出さなくても力になれるからだ。

どういうデザインにしようかな

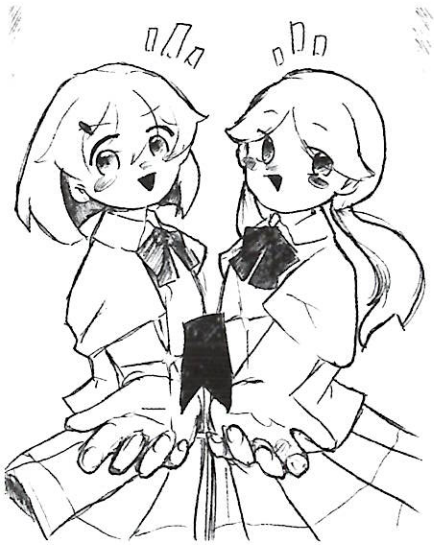
愛宕中と言えばあじさい生徒。植物に関するものにしようか・・・。愛宕中の立地も丘の上で、自然に囲まれているし、「緑」のイメージかな、と色が決定。緑からの連想で、名前はリーフリボンに決定となった。リーフリボンの形はなるべくアピールしたいため、大きく見せられる形にした。

リーフリボンが始まって、生徒総会の最後などの短い時間、少しの機会で提案していった。しかし、当時は生徒全員がいじめについて考えているわけではなく、全員がリーフリボンをつけることはなかった。

生徒たちの積極的な取り組みでどんどん発展

その後ゆういさんは卒業したが、次の生徒会長であるあやなさんが引き継ぎ、リーフリボンの普及活動を行っていった。生徒会はもちろん、当時の校長先生を始め、龍ケ崎市教育委員会教育長や愛宕中の先生方も率先してリーフリボンをつけ、広めてくださった。その甲斐もあって、リーフリボンは今ではほぼ全員がつけるようになっていった。そのため、形も変わりコンパクトになった。

生徒の提案が形になり、みんなが動いてどんどん良くなっている。勢いがある。学活や道徳でも、リーフリボンに関するテーマで授業をすることが多くなり、考える機会が増えていき、当時生徒会を担当していた先生も手応えを感じていた。



ある年の学年フォーラム

1年　いじめといじりの違い
　　パネルディスカッション
2年　いじめの四重構造について
　　実体験を語る生徒も
3年　いじめをさせない環境とは

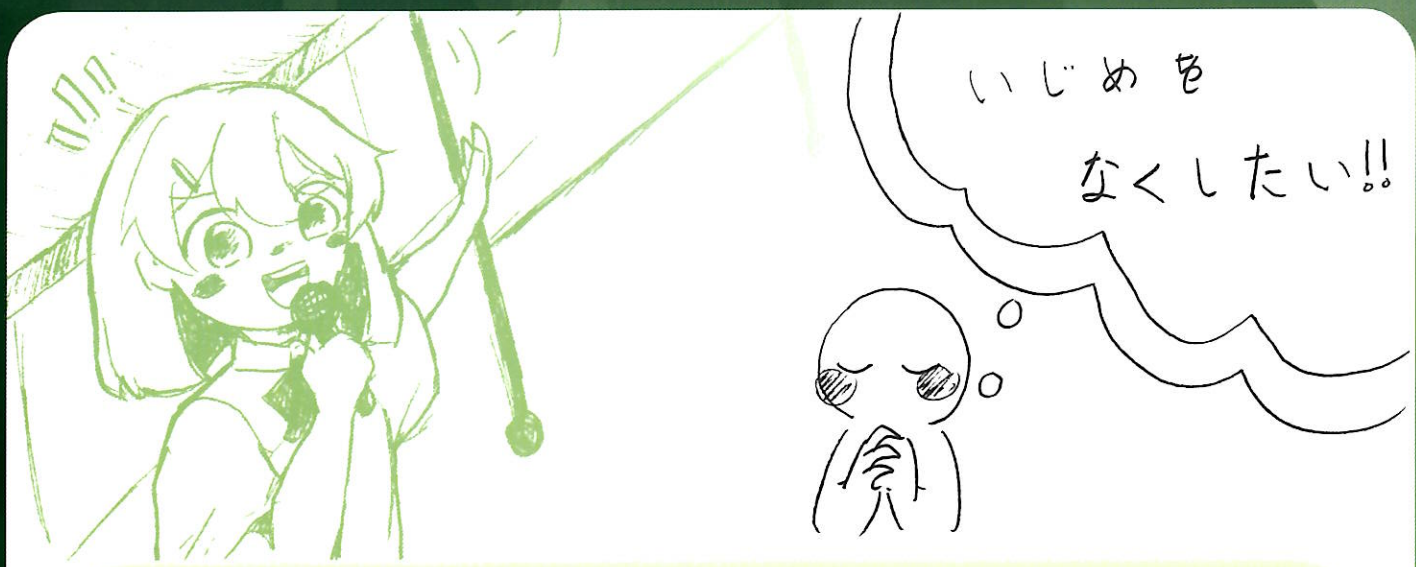
リーフリボン集会誕生・工夫ある取組み

そして愛宕中学校区の龍ケ崎西小学校・旧北文間小学校にもリーフリボンを紹介し、愛宕中だけでなく、愛宕中学校区全体を巻き込んでの活動となった。小中が連携していじめについて考える共通の場「リーフリボン集会」を開くこととなった。リーフリボン集会では、その年ごとに視点を変えてテーマを設定し、様々ないじめをなくすための取組みが工夫された。リーフリボン集会の前には、学年フォーラムを行い、各学年で話合いを行うなど、一人一人がいじめについてしっかりと考え、お互いの意見を交換し、お互いに認め合い、理解し合う時間を設けてから、集会に臨んだ。

リーフリボン集会では、事前のアンケートから愛宕中の課題を見つけ、課題解決の為に話し合ったり、学校生活でよくあるトラブルやラインのトラブルを実演し、いじめが起こりうる状況を具体的に紹介したり、クラスごとにいじめ撲滅宣言を作ったりした。リーフリボンを考えたゆういさんにも特別ゲストとして参加していただいたこともあった。

小学生からは「いじめをなくそう」と取り組んでいる先輩たちのいる中学校へ進学できるため、不安が少ないという声もよく聞いた。何かとても大きなことができたわけではなくても、自分たちの行ってきたことが、誰かのためになっているのだと思うと、生徒会や先生方、もちろん生徒みんなもとても嬉しいだろう。

リーフリボン物語



愛宕中が閉校すれども思いは消えず・・・

リーフリボンが誕生してから10年以上が経った今、リーフリボンは愛宕中の伝統として、大切に引き継がれてきた。ゆういさんの代から次の代へ、そしてそのまた次の代へと何度も受け継がれ、今の形へ進化していった。そんな状況の中で、ただ一つ変わらないものがある。それは「いじめをなくしたい」という思いだ。時代が変わっても、形が変わってもこの思いだけは変わることがなかった。むしろ、どんどん強くなり、今となっては生徒会だけでなく、先生、生徒、学校全体が一丸となって、この活動を行っている。今日、この日までリーフリボンが受け継がれ、多くの活動を行ってこられたのは、愛宕中全員に「いじめをなくしたい」「辛い思いをしている人を少しでも救いたい」という強い思いがあったからだと思う。「愛宕中学校」という名前がなくなり、新たなメンバーでスタートをきっても、その思いは受け継がれていき、これからもずっと消えることはないだろう。

一人の小さな思いが、今こうして形になり、大きな思いへと変わる。この思いにどれだけ救われた生徒がいたことだろう。どれほど安心して学校生活がおくれた生徒がいたことだろう。愛宕中の伝統を創ってくれただけでなく、先生方や生徒に達成感を与え、多くのことに気づかせてくれたゆういさんを始め、歴代の先輩方には感謝しかない。そして私たちはこの気づかせてくれたことを胸に、多くの事に挑戦し、成し遂げていきたい。次はあなたがゆういさんのように、人に何かを与えられる人になってほしい。

龍ケ崎西小学校へ届けるための
リーフリボンづくり

龍ケ崎西小学校とのリボンライン